



〔監修〕

小松左京／紀田順一郎

野十二全集

深夜の市長



三一書房

海野十三全集

第3巻 深夜の市長（第1回配本）

定価1800円

1988年6月30日 第1版第1刷発行

Printed in Japan

監修者	小松左京
	紀田順一
発行者	畠山滋
印刷所	日本写真印刷(株)
製本所	東京美術紙工

発行所 株式会社 三一書房

東京都文京区本郷2-11-3
電話 03(812) 3131~5 番
振替 東京 9-84160 番
郵便番号 113

深夜の市長・目次

太平洋雷撃戦隊 5

空襲下の日本 21

人間にんげん灰かい 41

猿ぼく鸚おう 61

火葬国風景 81

深夜の市長 103

地球盗難 217

解題「瀬名堯彦」 309

深夜の市長——海野十三全集・第3巻——

太平洋雷撃戦隊

軍港を出た五潜水艦 謎の航路はどこまで

「波のうねりが、だいぶ高くなつて来ましたですな」

先任将校は欄干につかまつたまま、暗夜の海上をすかしてみました。

「うん。風が呻りだしたね」

そういったのは、わが○号第八潜水艦の艦長清川大尉です。

司令塔に並び合つた二つの影は、それきり黙つて、石像のように動こうとしません。今夜もまた、第十三潜水戦隊は大波の中を、もまれながら進んでいるのです。暗澹たる前方には、この戦隊の旗艦第七潜水艦が、同じように灯火を消して前進しているはずです。又、後には、第九、十、十一の三艦が、これも同じような難航をつづけているはずです。五分おきにコツコツと水中信号器が鳴つて、おたがいが航路から外れることのないように、警戒をしあっています。

この五隻の○号潜水艦が、横須賀軍港を出たのは、桜の蕾がほころびそうな昭和○年四月初めでありました。それからこつちへ、もう一月ちかい日数がたちました。

その間、どこの軍港にも入らないし、島影らしいものも見かけなかったのです。

もつとも水面をこうやって航行するのは、きまつて夜分だけです。昼間は必ず水中深く潜航を続けることになっていましたので、明るい水上の風景を見ることが出来ず、水兵たちはまるで水中の土竜といったような生活をつづけていたわけでした。

とにかくこんなに永い間、どこにも寄らないで、一生懸命走っているということは、今までの演習では、あまり類のないことでした。

「どうも、本艦はどの辺を航海しているのか判らんねえ」

第八潜水艦の兵員室で、シャツを繕つていた水兵の一人がいました。

「もう二十五日もたつのに、どこの根拠地へも着かないんだからね」

それにこたえた水兵が、手紙を書く手をちよつと休めて、あたりの戦友をグルッと見廻しました。グルッと見廻すといつたつて、まるで樽の中のような兵員室です。右も左も、足許を見ても天井を仰いでも、すぐ手の届きそうなところに大小のパイプが、まるで魚の腸を開いたように、あらゆる方向に匍い並んでいます。

「第一不思議なのは本艦の方向だよ。或時は東南へ走っ

「ているかと思うと、或時は又真東へ艦首を向けている」
「そうだ。俺は昨夜、オリオン星座を見たが、こりゃひよつとすると、飛んでもない面白いところへ出るぞと思つたよ」

「面白いところへ出るって、どこかい。おい、いえよ」

「うふ。その面白いところというのはな」

「うん」

「それは……」

と、先をいおうとしたときに、室内に取付けてある伝声管が突然ヒューッと鳴り出しました。丁度その側に『猿飛佐助』を夢中で読んでいた三等兵曹が、あわてて立ち上ると、パイプを耳にあてて聞きました。何だかうから怒鳴っている声が洩れて聞えます。

「はいッ、判りましたッ」

パイプをかけて、一同の方に向いた兵曹は厳格な顔付で叫びました。

「兵員一同へ艦長から重大訓令がある。直に発令所へ集合ッノ」

皆、手にしていたシャツも手紙も、素早く箱の中へ片付けると、ドヤドヤと立ち上って発令所の方へ駆足です。何しろエンジンとエンジンの間をぬけ、防水扉のところまで頭を打ちつけそうになるのをヒョイとかがんで走りぬけるのですから大変です。あわてると駄目です。

宣戦布告の無電 雷撃隊の任務重し！

発令所には、さっきまで司令塔にいた艦長と先任将校とが、いつの間にか儼然たる姿を現しています。そして艦長の清川大尉の手には、一枚の紙片が、しつかと握られています。

「全員集合しましたッ」

当直将校が報告をいたしました。

「氣を付けッ」

一斉に、サッと、全員は直立不動の姿勢をとりました。何とはなしに、激しい緊張が全身に匍いあがつてきて、身体が細かく震えるようです。

艦長は、一歩前へ進みました。

「唯今、本国から重大なる報告があつたからして、一同に伝える」艦長は無線電信を記した紙片をうやうやしく押戴いて、「大元帥陛下には、只今、×国に対して宣戦の詔勅を下し給うた」

×国へ対して宣戦布告——一同は電氣にでも触れたように、ハッとしました。乗組員たちは、かねてこういうことがあろうかと覚悟をしていたものの、いよいよ詔勅

が下ったとなると、俄かに血が煮えくりかえるようです。思わずグッと握りしめた拳に、ねっとり汗が滲みでました。

「皇国のために万歳を唱える」艦長は静にいました。しかしその両眼は忠勇の光に輝いていました。

「大日本帝国、万歳！」

「ばんざーい」

「ばんざーい」

「ばんざーい」

艦内は破れんばかりに反響しました。

「次に——」艦長は語を改めました。「南太平洋に出動中の連合艦隊司令長官閣下から、本戦隊の任務について命令があったが、それを報告するに先立って、本艦の現在の位置について述べる」

乗組員は、いまや待ちに待った本艦の位置が判るんだと知って、思わず唾をゴクリとのみこんだのです。

「——本艦は現在、米国領ハワイの東方約二千キロの位置にある」

乗組員は、思わず口の中で、「あっ」と小さい叫び声をあげました。

ああ、×領ハワイ。

×国艦隊が太平洋で無二の足場とたのむ島。大軍港のあるハワイ。

そのハワイを更に東へ二千キロも、×国本土に近づいたところに、わが潜水戦隊は入りこんでいるのでした。

まるで×の巢の中です。ちよいと手を伸ばしただけですぐめばしい相手にぶつかれるのです。またそれだけ自分の身の上に大危険があるわけですが、そんなことを氣にかけるような乗組員は、一人もありませんでした。それにしても、わが潜水戦隊の、この遙かなる遠征の使命は、いかなることでありましょうか。

「最後に、本戦隊に下された命令を読みあげる」艦長はぐるりと一同を見まわしました。

「連合艦隊司令長官命令。×領ハワイ島パール軍港に集リタル×ノ大西洋及び太平洋合同艦隊ハ、吾ガ帝国領土占領ノ目的ヲ以テ、今ヤ西太平洋ニ出航セントセルモ、ハワイ根拠地ノ防備ニ一大欠陥アルヲ発見セリ。ヨリテ直ニ二個師団ノ陸兵及ビ多数武器ヲ大商船隊ニ乗セ、パナマ運河ヲ通過シテハワイヘ向ケ出發セシメタリ。モシコノ大商船隊ヲシテ、ハワイニ到着セシメンカ、ハワイ島ハ一躍、難攻不落ノ要塞トナリ、×軍ノ東洋進出ヲ容易ナラシメ、進ミテ、皇國ノ一大危機ヲ生ズルニ至ルベシ。故ニ第十三潜水戦隊ハハワイト、パナマ運河トヲ結ブ海面附近ニ出動シ、途中ニオイテコレヲ撃滅スベシ。終」

非常に重大なる任務でした。間もなく日×両軍の主力

艦隊が決戦しようという時、この大商船隊がハワイにつけば、×艦隊は岩をふまえた虎のように強くなるでしよう。又その反対に、この大商船隊を撃滅出来れば、わが連合艦隊の作戦は大分楽になります。随つて、この大商船隊を葬るか、それともその商船隊を護る×の艦隊にこつちが撃退されるかによつて、両軍決戦の勝敗がどちらかへハッキリきまることになるのです。

清川艦長はこのことを一通り部下に説明したのち、一段声を励ましていいました。

「大元帥陛下の御命令により、只今からわが第十三潜水戦隊は、この名譽ある任務を果そうとするのだ。——総員、直に配置につけッ」

一同はもう一度、万歳を唱えたいのを我慢して、サツと拳手の敬礼をして忠勇を誓いました。誰の顔にも、見る見るうちに、盆と正月とが一緒に来たような喜色がハッキリと浮かび上りました。操舵手は舵機のところへ、魚雷射手は発射管のところへ、飛んでゆきました。

×の駆逐艦に見つかる 八門の
大砲にねらわれての大離れわざ

勇みに勇む第十三潜水戦隊は、その日から船脚に鞭う

つて、東南東の海面へ進撃してゆきました、いよいよ×国は近くなる一方です。

それは宣戦布告を聞いてから、丁度六日目にあたる日の昼下りのことでありました。第八潜水艦の司令塔は、にわかに活潑になってきました。

「どうも哨戒艦（見張の軍艦）らしいな」と清川艦長が叫びました。

「まだ向うは気がついていないようですね」

先任将校は双眼鏡から眼を離して、いいました。

「艦長どの、旗艦から報告です。『正面水平線上ニ×国二等駆逐艦二隻現ル』」伝令です。

「よし、御苦労」

行く手にあたつて、高くあがつた微かな煤煙は、だんだんと大きくなつて来ます。よく見ると、成程それは×の二等駆逐艦が二隻並んでこちらへ進んで来ているのです。潜水艦の二倍もの快速力で走り、そして優勢な大砲を積んでいるという、潜水艦にとっては中々の苦手、その駆逐艦が、しかも二隻です。

だから、この場合潜水戦隊としては、出来るだけ姿を見せずに逃げだすのが普通なのです。

「艦長どの。司令官閣下から、お電話であります」

伝令兵は忙しく、清川大尉の方へ報告をいたしました。「うむ。——」

大尉が無線電話機をとりあげて見ますと、待ちかまえたように、司令官の声がしました。

その電話は、×を控えて、二分間ほとんど続きました。

その間に、この難関を切りぬける作戦がまとまりました。「それでは——」と司令官は電話機の彼方から態度を正していわれました。

「貴艦の武運と天佑を祈る」

「ありがとう存じます。それでは直に行動に移ります。ご免ッ」

電話機はガチャリと下に置かれました。

(よオし、やるぞッ)

艦長の顔面には、固い決心の色が、実にアリアリと出ています。

「総員戦闘位置につけッ」

そう叫んだ艦長は、旗艦ははじめ四隻の僚艦の行動を、司令塔の上からじっと見ています。四艦はグッと揃って右に艦首を曲げました。そしてグングンと潜航です。見る見る波間に姿は隠れてしまいました。海上に残ったのはわが第八潜水艦一隻だけです。

「水面航行のまま、全速力ッ」

ビューンと推進機は響をたてて波を蹴りはじめました。何という無茶な分らない振舞であらう。まるで、敵の牙の中へ自らとびこんでゆくようなものです。

五分、十分、十五分……。

航路をやや外れかかった×の哨戒艦が、俄かに艦首を向けかえて、矢のように、こっちへ向つて来ます。

ああ、遂に×の駆逐艦二隻と、第八潜水艦との正面衝突——これはどっちの勝たか、素人にも判ることです。

恐らく潜水艦の砲力が及ばない遠方から、はるかに優勢な駆逐艦の十センチ砲弾が、潜水艦上に雪合戦のように投げかけられることでしょう。そうなれば一溜りもありません。

しかし艦長の清川大尉は、悠々と落ちついていました。味方の四艦からは、もうかなり離れました。そのときです。

「面舵一杯ッ」

艦長の号令に、艦首はググッと右へ急廻転しました。

×の哨戒艦も、これに追いつがるように、俄かに進路をかえました。四千メートル、三千メートル……。×の四門の砲身はキリキリキリと右へ動きました。

「あッ」

八門の砲口から、ピカリ赤黒い焰が閃きました。と同時に真黒い硝烟がパッと拡がりました。一斉砲撃です。どーん。どど、どーん。

司令塔のやや後の海面に、真白な太い水柱がドッと逆立ちました。まだすこし遠すぎたようです。

「×艦はあわてているぞッ」

清川艦長は微笑しました。

「もう少しだ。全速力！」

○号潜水艦はありつたけの快速力を出して走ります。

しかし、×艦はグングン近づいて、いよいよ完全に弾丸のとどく所へ迫りました。砲身には既に新たな砲弾が詰められたようです。こんどぶつ放されたが最後、潜水艦はどっちみち沈没するか、さもなくても大破は免れないでしょう。乗組員の胆のあたりに、何か氷のように冷いものが触れたように感じました。

そのときです。

が、が、がーン。

さッと周をとりまいた黒煙。

「あッ——」

「やられたな、どうした伝令兵！」

艦長の声です。弾丸は司令塔の一部を削りとって海中

へ……。

「しっかりしろ、傷は浅い」と先任将校。

×の大砲は、いよいよねらいがきまつて来たようです。いよいよ危い次の瞬間……。

「おお、あれ見よ！」

今や追撃の真最中だった×の哨戒艦の横腹に、突然太い水柱があがりました。くらくらと眩暈のするような閃

光。と、ちよつと間をおいて、あたりを吹きとばすような大音響！

どボン、ぐわーン。

×艦の胴中から四方八方に噴き出る黒煙。——^{マスト}檣が折れて空中に舞い上る。煙突が半分ばかり、どこかへ吹きとばされる。何だか真黒い木片だか鉄板だか知れないものが、無数に空中をヒラヒラ飛んでいる。

「作戦は凶に当たったぞッ」

艦長は叫びました、×艦隊は清川大尉の第八潜水艦を見付けて、夢中になって追跡したのです。まさか他の四隻の潜水艦が隠れているとは露知らず、遂にうまうま計略に載せられて、僚艦四隻の待ちかまえていた魚雷のねらいの中へ、ひっぱりこまれたのでした。

大きいといっても二等駆逐艦です。ドンドン傾いてゆきます。×兵は吾勝ちに海中へ飛びこんでいます。

「万歳！」

「潜水戦隊、万歳！」

海面を圧して、どつと喜びの声があがりました。

無念の手傷

取残された第八潜水艦

初陣に、×の哨戒艦二隻を撃沈して、凱歌をあげたわが第十三潜水艦隊は、直に隊形を整えて、前進をつづけようといえました。ところが、ここに大変困ったことが起りました。

それは一番の手柄をたてた第八潜水艦の出入口の蓋が、敵弾に壊されたことです。これがしつかり閉じられないと、潜水することは出来ません。

これには清川艦長は勿論のこと、司令官も心を痛められました。しかし、これから先の大事な任務を思うと、ここでぐずぐずしているわけにゆかないのです。

司令官は心をきめて、第八潜水艦をあとへ残し、無事な四隻を率いて、目的のパナマ運河近くへ進むこととしました。

傷ついて取残された第八潜水艦の心細さはどんなでしょう。蓋を直しきらないうちに、もし先刻のような駆逐艦に見つかったら、今度こそは否応なく、撃沈されてしまいます。あれほどの大手柄をたてた艦に、なんと惨い御褒美でしょう。

だがあくまで沈勇な清川艦長は、全員を指揮して、早速修理にとりかかりました。もうこうなったら、運は天に委せるのです。委せてしまえば、かえって朗かな気持ちになります。

一時間を過ぎ、もう二時間になろうというときになって、やっと出入口の鉄蓋は、間に合わせながら役に立つようになりました。大変な努力です。そして武運に恵まれたこの艦は、その間×国の艦船にも見つからずにすみました。一同の顔には、隠しきれない喜びの色が浮かびあがりました。

「やれやれ」

「お祝いに、煙草でももう」

一同ホッとして、腰をのびかけたその時です。

監視兵が、俄かに大声をあげました。

「艦長どの、×船が見えます。本艦の左舷二十度の方向です」

「なに×船？」艦長は直に双眼鏡をとって、海面を見渡しました。「うん、これは×国の汽船だな。これは大きい。まず、三万噸はある」

「軍需品を積んでいるようですね。甲板の上にまで積みあげています」

副長がそういつているうちに、汽船は急に進路を曲げて、こつちへ驚進して来ます。

「おや、あいつ、こっちへ向ってくるぞ」

「こりゃ怪しいですな。大砲を持っているわけでもないらしいですが」

「とにかく停船命令に一発、空砲を御馳走してやれ」

「はッ——主砲砲撃用意ッ」

艦内は急に緊張しました。実に危いことでした。もう三十分も早ければ、潜水艦の運命はどうなったかわかりません。

「艦長どの報告」監視兵が突然叫びました。「×船から飛行機が飛出しました。只今高度、約二百メートル」

「うん。とうとう仮面を脱ぎよったぞ、飛行機を積んでいるから、先生気が強いのだ」

「艦長どの。艦上攻撃機です」

「カーチス機だな」

艦長は別にあわてた様子もなく、汽船と攻撃機とをじつと見つめています。

大胆不敵の艦長 痛快な捨身の戦法

一難去って又一難。こんどの相手は、潜水艦の最も苦手とする飛行機です。これに会ったら最後、いくら潜っ

ても逃げようとしてもだめです。三十メートルや四十メートルの深さでは、海水を透して、アリアリと見えるからです。また水面を全速力で逃げ出しても、潜水艦と飛行機の競走では、まったく亀と兎で、瞬（また）間に追いつかれてしまいます。折角危い命を拾ったと思った第八潜水艦でしたが、どんなにもがいてみても、今度という今度は最期が迫ったようです。

大汽船はと見ると、マストの上に鮮かな××旗をかかげ、憎々しく落着いて、こっちを向いて快走してきます。自分の飛行機がどんなに痛快に日本の潜水艦をやっつけるか、高見の見物をしようというつもりに違いありません。

「生意氣な汽船だ」

先任将校が耐（た）えかねたように、口の中で怒鳴りました。しかし誰もが、もう覚悟をきめました。この上は、艦長からの果敢なる命令を待つばかりです。

航程六千キロ。本国を後にして、勇敢にも×国の海に進入した第八潜水艦も、遂にここで空しく海底に葬られねばならないのでしょうか。

艦長清川大尉は、ビクとも驚きません。ここで騒いだり、悲観しては帝国軍人の名折れです。

（日本男子は、息の根のあるうちは、努力に努力を重ねて、頑張るのだッ）

大尉は日頃から思っていることを、口の中でいつてみました。

見れば、×の攻撃機は、わが艦の砲撃をさけるかのよう、やや向うに遠く離れて、もっぱら高度をあげることに努めているのでした。やがてこっちの手の届かない上空から爆撃を始めようという作戦なのでしょう。

「よし、やるぞ」

大尉は何か決心を固めたものらしく、その両眼は生々と輝いてきました。

「潜航ノ 深度三十メートル、全速力ノ」

艦長は元氣な声で号令をかけました。

艦はみるみる海上から姿を消して、なおもドンドン沈んでゆきます。潜望鏡も、すっかり水中に没して、今は水中聴音機が只一つのたよりです。こうなると、いつ飛行機から爆撃されるか、全く見当がつかなくなります。

乗組員は、艦長の心の中を、早く知りたいものだと思っていました。

「深度三十メートル」

潜舵手が明瞭な声で報告しました。

「よし、そこで当直将校、水中聴音機で探りながら、×の汽船の真下に、潜り込むのだ。丁度真下に潜っていないと、危険だぞ」

艦長の口から出た命令は、なんとという大胆な、そして

思いもかけぬ作戦計画でしょう。ところもあるに、×船の腹の下に潜れということです。成程、この大汽船の腹は広々として、○号潜水艦の五つや六つは、わけなく隠れることが出来ます。

乗組員は勇躍して、艦体を操りました。

これに気づいた×の汽船は大あわてです、備えつけの砲に弾をこめているうちに、潜水艦はもう、砲撃ができないほど、船底間近にとびこんで来たのです。

×の攻撃機は、潜水艦からの砲撃をさけるためにすこし離れて飛んでいたもので、あつと氣のついたときには、もう潜水艦は、グルリと半廻転して、味方の船底にびつたりと附いてしまったあとでした。

「こりゃ、弱ったな」

さすがの大汽船も、爆弾を懷中にしまっているようで、氣味の悪さつたあたりありません。爆雷を水中へ投げてもよいのですが、下手をやると、爆発した拍子に、日本の潜水艦の胸中に穴をあけるばかりか、自分の船底にも大孔をあけてしまわないとはいえないのです。そんな危険なことがどうして出来ましょう。

「こいつは困った」

攻撃の姿勢をとって、空中高く舞い上った×の飛行機も、同じような嘆声をあげました。折角爆弾をおとしてやろうと思ったことも今は無意味です。敵軍の指揮者た